



# 蠱の作り 方

川崎ゆきお

「長雨ですねえ」

「夏の長雨、これは涼しくていいのですが、厄介なことも起こります」

「冷害ですか」

「そこまでいなくても野菜が育ちにくい。日照時間が短いですから、それよりも……」

「はい」

「昔は稲子が出た」

「イナゴですか」

「虫じゃない。稲の子だ」

「それは稲穂じゃないのですか」

「稲とは分離される」

「はあ。妙なことを。何ですかそれは」

「稲の茎や葉を見たことがあるかね」

「それはまあ日本中にありますよ。田圃のあるところなら。見たことのない人の方が珍しいでしょ。いや、都会で育ち、田圃など見たことがない人がいるかもしれませんがね。しかし少し郊外へ行けば、田圃はあるでしょ」

「長い茎だろ」

「そうですねえ。あまりじっくりと見たことはないです」

「あれは藁になる」

「藁も最近見ませんねえ」

「稲子は藁ではない緑の子だ」

「はい」

「それを稲子のミドリゴという」

「ミドリゴですか、嬰兒ですよ。産まれたばかりの」

「それじゃない。緑の子だ」

「何ですか、それは」

「これは呪術でな。最近はやる人間はおらんが、稲の穂がまだ出る前の稲で折り紙のように人型を作る」

「胡散臭い話ですねえ」

「抜いては駄目だ。死ぬからな。それこそ藁になる」

「はい」

「依り代のようなものだな、それで編んだ人型は」

「それ、バツタと間違えそうですねえ」

「緑色のトノサマバツタほどの大きさだから、似ておる。しかし、形は人間だ。単純な形だがな。お雛さんも、昔はそんな草人形のようなものだったらしい」

「そうなんですか」

「稲子は生き人形だ。根と繋がっておる。だから成長もする」

「でも結構癖の付いた稲になりますねえ」

「依り代とは元来、神や精霊が乗り移るところ。しかし、この依り代、生きておる」

「それが呪術ですか。魔法ですか」

「これを仕込んでおくと、入って来るものがある」

「乗り移るのですね。稲子に」

「そうだ。すると、切れる」

「何が」

「茎が途中で切れる。それで分かる。繋がっておらん」

「はあ」

「その人型には脚も腕もあるが、羽根もある。それで飛ぶ」

「天使のようなものですね」

「エンゼルが、そんな仕掛けで入ると思うか」

「そうですね。やはり妙なものが入りそうですねえ」

「術者は、毎日見て回り、根が切れた稲子を回収する。早いほうがいい。まだ、入りたての赤子のような稲子なのでな。これを式神として育てる」

「それが稲子ですか」

「中に何が入っているのか分からん。大した精霊ではない。ただ、狐や狸ではない。虫系だろうなあ。

「それはマジモノですか」

「蟲だ」

「コ」

「虫が多い漢字だ」

「はい」

「稲の大敵は虫でもある。害虫だ。だから、虫が集まりやすい。そのため、虫の精霊が憑きやすい」

「根切りされた人型の稲子は枯れませんか」

「枯れて、藁になる」

「はい」

「これは脆いので、叩かれると壊れやすい」

「それを操るわけですね」

「式神を飛ばすのは紙飛行機を飛ばすよりは楽だが、非常に脆い」

「楽しい話、有り難うございました」

「なにになに」

田圃で、老人が、そんな言い伝えを語った。

谷間で田畑が少ないため、まじもの師として出稼ぎに出た村人もいたとか。

